

# 続・保育の中の小さなこと大切なこと

(10)

守 永 英 子

三歳児クラスの担任は、今年で、何度も目になるであろうか。何度も経験しても、"驚き"と、"笑い"と、"当惑"の種は、尽きないものである。

五月も末近いある日、保育室にいる私のところへ、庭から入って来たAが、やつてきた。うれしそうな顔で、「先生、金魚！」と言う。意味が飲み込めないままに、ふとAを見る。何やら手に握っている。そして、ちらりと、赤いものが見えるではないか。

思いがけない出来事に、私の方がびっくり。「あら！ どこから持ってきたの。早くおうちに帰してあげなければ……手に持つてると、死んでしまうわ」。あわてて、立て続けに言う私に、Aは困ったような顔をして、急いで庭の金魚鉢に返しに行った。彼は、金魚を手づかみにできたうれしさに、見せにきたものと思われる。その時は、驚き、あわてて、ゆとりを失ったものの、あとから思えば、子どもらしく、微笑

ましい出来事であった。

この同じAが、今度は、大人びた言動で、私を驚かした。六月も半ば過ぎた頃、子どもたちの様子も、やや落ちついてきたので、新しい経験として、絵の具で絵をかくことを試みた。初めてのことでもあり、約半数の子どもが積極的に参加した。絵をかくと言っても、筆にたっぷりの絵の具をつけて、紙に塗りつけるだけ、と言つてもよい状態である。

本来ならば、絵の具の取り扱いに慣れない子どもたちのそばにいるところであったが、朝、母親から離れるようになつて間もないMの希望で、せがまれて、ぶらんこの方について行つた。ぶらんこ、鉄棒、すべり台、と移動して、やつと、お友だちと遊び始めたMを庭に残して、部屋に戻ると、Aがちょっと困った顔で私を見上げ、「先生、お外の人が、先生と遊びたいって言つてるよ」と言う。Aの心を測り兼ねて、少しとまどいながら、「今、お庭で遊んできたところな

の。今度は、絵をかいている人を見にきたのよ」と言うと、Aは、相変わらず困惑の表情で、「Aちゃん、まだ三歳八ヶ月だから、上手に絵がかけないの」と言う。三歳児の、思いがけない複雑な心の動きに驚かされて、気持の整理のつかないまま、「Aちゃんが好きなようにかけばいいのよ」と答えて、その場は済んだものの、私の心には、何か未解決な問題が残されたのを感じた。

Aは、自分がまだ絵が上手にかけないと、自分を捉えていたこと、大人がそれをどう見るかを気にしていると思われる。できれば、大人の目を逸させたいというように、「外の人が、先生と遊びたいと言つていて」と間接的な方法をとつたこと……これらはどういう意味を持つていてあるうか。

これに関連して、これより十日ばかり前の、Aの行動を思起こしてみた。

入園以来、Aは、聞きわけのよい、節度のある子どもらしさもそなえた「いい子」という印象であった。母親も、「からだの弱いこと以外は、言うことがない」と言つていた。

このAが、おもちゃのはいつているかごを、ひっくり返しながら、部屋を一周して、部屋中におもちゃを散らし、私と一緒にやってきた。「散らかしちゃったよ」と、うれしそうな、それでいて私の反応を気にする様子で、「ほんと、沢

山でたのね」という、さり気ない返事では、物足りないのか「いいのよ。おかげのとき片づけてね」というまで、何度か「散らかしちゃった」をくり返して、私の反応を求める。

その二日後、Aを含む四人の男児が、他の子どもと一緒に私が庭に出ている間に、部屋の中の水道で遊び、流しの前を水びたしにしたことがあった。私が、部屋にいる子どもを気にして戻ったときには、すでに、通りかかった他の先生が始末をして下さったあとであつたが、Aは、赤くなつて、困惑した表情で、部屋の入口に立ちふさがり、「先生、入つてこないで。出でていって」と、いつになく激しさで、私を阻止しようとした。

これらの一連の行動は、今まで、家庭の中で、「いい子」であった、Aの変化を示すもののように思われる。どのように変化が、この小さな三歳児の中に、起こっているのだろうか。自分の変化に、或は、今まで見えていた自分に、気づいて、A自身がとまどつてているのだろうか。散らかすA、水びたしにするA、絵がかけないA（彼自身が思うようには）、そうしたものを全部ひっくりめた自分自身を受け入れることができるようにAを助けるのが、今の私の役割なのだろうか。つかめぬことが多いまま、これからAの成長をじっくり見守り、考えて行きたいと思う。